

学校経営のポイント

激減した児童・生徒の“いじめ・不登校等”

若井 彌一

2004(平成16)年1回目の教職研修資料「学校経営版」をお届けいたします。年頭に当たり、皆さまのこの1年のご多幸とご活躍を心からお祈り申し上げます。

さて、今回は去る12月19日に公表された文科省の「生徒指導上の諸問題の現状について」を素材として述べてみたい。

激減した“いじめ・不登校”等の発生件数

注目されることは、暴力行為の発生件数(公立小・中・高等学校の計)が学校内29,454件(前年度比3,685件)、学校外4,311件(前年度比790件)、いじめの発生件数(公立小・中・高等学校および盲・聾・養護学校の計)が22,205件(前年度比2,832件)、不登校児童・生徒数(国・公・私立の小・中学校の計)が131,252件(前年度比7,470人)というように、長年に及んでの重要な教育指導上の取り組み課題である、暴力行為、いじめ、不登校の発生件数(人数)が、いずれも前年度比で大幅な減少に転じたことである。

これらの数値についての速報はすでに昨年8月に公表されていたが、今回の数値が確定値とされている。

上記以外の数値も、たとえば高等学校中退者数(公・私立高等学校の計)89,409人(前年度比15,485人)、児童・生徒の自殺者数(公立小・中・高等学校の計)123人(前年度比11人)というように、については激減し、については微減している。

これら～の数値は、増加するよりは減少するほうがよく、増加するほうがよいとはおそらく誰も思わない。そして、児童・生徒数の減少が続いているのだから、暴力行為、いじめ、不登校の発生件数

が増加しないことは当然として、児童・生徒数の減少に対応した形で、発生率はともかく、せめて発生件数だけでも減少しないものかとの思いをもって、毎年公表される数値にやりきれない思いを抱いていた方々には、ようやく「好転」の曙光を見たような心境ではないであろうか。

好転を維持する充実した教育的取組みを

児童・生徒数の減少に反して、暴力行為、いじめ、不登校の発生件数が増加したり、増加しないまでも高水準で推移するというのは、いかにも不自然というより、異常なことであった。

その意味では、今回の公表された数値は、異常な状態からの脱出・脱却の兆し(萌し)を示したに過ぎないものであり、肝心なことは、この好転を各学校等の充実した教育的取組みによっていかにして維持していくかである。

14年度の調査結果に表れた単年度の好転現象が15年度以降も続くと予想するのは、あまりにも楽観的すぎる。単年度比(前年度比)の減少が顕著であったからである。次回調査結果では、統計的にはまた単年度比で好転から逆転するようなことになることも十分に予想される。

しかし、そのこと自体を過大視するのではなく、各学校では自校の児童・生徒の一人ひとりに目配り・気配りの行き届いた、充実した教育的取組みの重要性について教職員全員が自覚を新たにしたい。その自覚に基づいた各学校における一人ひとりの教職員の、あるいは複数の教職員の高水準の取組みが、結果的に統計的数値の好転現象を維持し、あるいは極端なゆり戻し(逆転)現象を防止することになる。

(わかい・やいち=上越教育大学教授)

...本紙は<http://www.kyouiku-kaihatu.co.jp>でも掲載

●新刊案内●

緊急出版! 1月31日刊行予定 予約申込み受付中

教育開発研究所刊

文科省通知(12/26)に基づく改訂のポイントを徹底解説 / B5判 240頁・定価 2500円

『改訂学習指導要領 全文と要点解説』

研修誌・図書の小社への直接注文は、無料FAX 0120-462-488をご利用ください(24時間受付・即日発送)